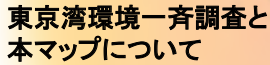


～東京湾の新たな再生に向けて～

[illegible]

令和5年(2023年)3月
Vol.17

東京湾再生推進会議モニタリング分科会
九都県市首脳会議環境問題対策委員会水質改善専門部会
東京湾岸自治体環境保全会議
東京湾再生官民連携フォーラム(モニタリングPT、生き物生息場づくりPT、東京湾の窓PT、指標活用PT)
特別協力：東京湾生物情報とりまとめおせっ会

50 公サ団体から構成される「東京湾再生推進会議」では、東京湾の環



東京湾再生推進会議WEBサイト

https://www.1.kaiho.mhl.go.jp/KAIHO/TOB_Relaissance/

東京湾の再生のための官民の協働体制

東京湾再生推進会議

- 都市再生プロジェクト第三次決定（平成13年12月）に基づき、平成14年2月に設置。
- 平成25年6月に「東京湾再生のための行動計画（第二期）」を策定。

協力

東京湾再生官民連携フォーラム

- 多様な主体の参画による議論の活性化・多様化を図るため、平成25年11月に設立。
- フォーラムでは、東京湾再生に係る課題や科学的知見や取組に関する情報を共有。

東京湾の再生のための行動計画(第三期)について

目標

快適に水遊びができ、「江戸前」をはじめ多くの生物が生息する、
親しみやすく美しい豊かな「海」を多様な主体が協力しあうことで取り戻す。
～ 流域3,000万人の心を豊かにする「東京湾」の創出 ～

豊かな水環境の実現

楽しく、親しみやすい
東京湾の創出

活動の環(わ)の拡大

計画のポイント

- ・ブルーカーボン生態系を活用した多様な取組の推進
- ・多様な官民連携の推進と、流域3,000万人がつながる交流機会の創出
- ・第二期計画からの取組についても継続的に推進

—おいては 研究 環境保全 水産・資源管理 港湾開発 再生 市民

環境、水産、港湾

政策・事業

アクション

市民活動

江戸前ハゼ、アサリ

論文・報告書

100年の変遷、人と自然のかかわりの再生、生きものと共に

蓄積

解析・考察

前処理

標準化・メタデータ

観測値

計測法・指針

データベース

漁海況、貧酸素

公共用水域、定線調査
水質、底質
生物、赤潮・青潮

対象

TOBEX、モニタリング
ボスト、一斉調査

モニタリングの意義と実施例

調査	公共用水域水質測定	広域総合水質測定	モニタリングサイト1000	自然環境保全基礎調査
頻度	毎年	四半期毎	毎年	数年おき
項目	健康項目、 生活環境項目、 要監視項目	水質 (pH, COD, N, P, Chl)、 底質、 底生生物、 プランクトン	生態系 (陸域・海域： 磯・干潟・アマモ場・藻場、 サンゴ礁) 毎の生息生物種など	緑の国勢調査 (陸域、 陸水域、海域) 生態系の面積、生息生物など
実施	自治体	環境省	環境省	環境省
データ	1971年から実施、長期データ [1]	1979年から、 海域毎に実施 [1]	2003年から実施、生態系の劣化を監視 [2]	1973年に第1回、2005年からの第7回まで実施 [3]
根拠法・活用	水質汚濁防止法 (15条)	総量規制	生物多様性国家戦略	保全施策、環境影響評価、マスタープラン

[1] 水環境総合情報サイト <https://water-pub.env.go.jp/water-pub/mizu-site/>
 [2] モニタリングサイト1000 <https://www.biodic.go.jp/moni1000/>
 [3] 生物多様性センター https://www.biodic.go.jp/kiso/fnd_list_h.html

(モニタリングPT)

再生において、水産資源の動向は大きな関心事です。漁業・遊漁の情

水産関係の継続モニタリング例

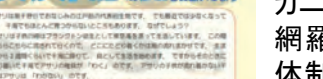
調査	浅海定線調査	赤潮・青潮	漁海況情報	貧酸素水塊
頻度	毎月	随時	毎日	毎週・隔週、6時間毎（予備値）
項目	標準項目（水温・塩分・透明度・水色・気象）、特殊項目（DO、pH、COD、N、P、Pクロロフィル）	地点、発生回数・日数、種組成（赤潮）、漁業被害	流向・流速 水温	溶存酸素分布 東京湾漁業研究所、水産研究所、内湾底曳き網研究会連合会、東京都環境局、千葉県環境研究センター、海上保安庁
実施者	水産研究所等	環境局・環境研究センター	一都三県の水産研究所など	
データ	1966年から、中央水試の打合せ会の決定に基づき実施	公共用水域調査と連携、独自の判定基準	関東・東海、東京湾口、リアルタイム海況データを提供	2021年から、東京湾漁業・環境情報提供システムに情報集約[1]
根拠法・活用	漁場環境の把握 長期変遷	被害軽減、環境変化の把握	黒潮の蛇行や急潮などの警戒	操業参考、青潮警戒

[1] 東京湾漁業・環境情報提供システム <http://www.pref.chiba.lg.jp/pbcbsuishi/cbtkinfo/>
 [2] 東京湾環境情報センター <https://www.tbeic.go.jp/>

2020年からは東京湾岸やドカリ・カニ類生態系アンケート調査が始まり、網羅的な生息生物のモニタリング体制の確立に向けた努力が続けられています。

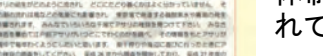
江戸前アサリ

「わくわく」登場への要約が掲載されています。



江戸前ハゼ復活プロジェクト

<https://mahaze.suisan-shinkou.or.jp/>



（エニシタ）（ゾロ）

（エニシタ）（ゾロ）

(モニタリングPT)

宮民連携フォーラムの生き物生息場つくりPTでは 東京湾内

[illegible]

生き物生息場づくりPTでは、東京湾の生態系再生という長期的な視点から、小規模でも生き物の生息場を増やしていくことの重要性を確認し、10年スケールでの干潟・浅場造成・覆砂・盛土による底質改善や、湿地・藻場造成、護岸等施設の老朽化に伴う構造物更新に取り組み、旧海岸線沿いの在来種生息地保全・拡大や、自生種個体群の回復などに努めることが必要との認識で活動を続けています。

埋立てにより運河となった旧海岸線の河口干潟・湿地で確認された生物
(生き物生息場つくりPT)

民連携フォーラムの東京湾の窓PTでは、東京湾やその

2019年には、東京湾ぐるっとスタンプラリーを実施し、管理主体

や分野が異なる14の施設が*「東京湾」という共通項で連携することができました。

同年12月には「未来の東京湾と人のつながりの再構築に向けた、東京湾の窓施設のネットワーク推進に関する提案」を提出し、<1>教育分野との連携、<2>窓施設の横断的活動の活性化、<3>研修等の実施を呼びかけています。



スタンプラリーのチラシと窓施設紹介

2022年3月には、江戸前勉強会特別企画「東京湾にだけけよう!」を開催し、COVID-19のまん延に対応した環境教育プログラムの実施の状況を共有し、オンラインの活用なども含め、優れた取り組みを相互に学びあいました^[1]。

[1] 江戸前勉強会記録
<https://coastcard.jp/jp/江戸前勉強会/#tokubetsu>

勉強会の意見交換では、東京湾で興味のあることや、窓施設に期待することについて自由に意見をを出していただき、生物やアクティビティに加え、歴史や風景などに注目が集まるとともに、スタンブラーの実施への期待なども述べられました。

(東京湾の寄PT)

(東京湾の窓PT)

南雄フューラムの指標活用PTでは 南宮済再生

Year	Improvement (改善)	No Change (変化なし)	Worsening (上昇)
2013年度	5	45	2
2014年度	8	39	3
2015年度	10	41	2
2016年度	2	47	3
2017年度	1	43	8
2018年度	3	37	13
2019年度	7	34	13
2020年度	0	37	18

また様々な視点からの東京湾の変遷を把握するために、第22回東京湾シンポジウム(2022年10月開催)において、～近年における東京湾の環境の変化～に寄せられた情報に基づき環境情報マップが作成され、様々な水質・環境変化が生物の生息・分布に影響を与えている様子が整理されました。

[illegible]

第22回東京湾シンポジウムで共有された情報を元に作成された環境情報マップ
(左:水質、右:生物、この他に生物(浅場)も作成された)

[1] 東京湾再生のための行動計画（第二期）第2回中間評価（付録）報告書
https://www1.kaiho.mlit.go.jp/KANKYO/TB_Renaissance/RenaissanceProject/AP2_Evaluation2.pdf

[2] 東京湾再生推進会議
https://www1.kaiho.mlit.go.jp/KANKYO/TB_Renaissance/RenaissanceProject/Evaluation.htm

湾再生推進会議、東京湾再生官民連携フォーラムなどの関係者に「東京湾

東京湾の日や感謝祭を盛り上げて行きたい。
地域毎に官民連携で生き物調査をしたり、写真
コンテストをしたり、そうした活動の成果を共有
近くて遠い東京湾をもっと身近に、大切にするた
めに官民ともに汗を流しましょう！！

流域人に東京湾の恵みが認識されるようにしたい。そのために、各地域ごとの評価があってもいいのではないだろうか。

東京湾の生き物、産業（漁業など）、歴史などに対してより多くの郡民が興味・関心をもってもらえるよう、市民（特に子どもや親子）が参加しやすい企画・イベントがさらに増えればよいと思います。

モニタリングPTで主催した江戸前勉強会※でも、第3期計画のあり方、期待などについてご意見を伺いました。

負荷削減と豊かさの両立が肝心ですね。

まちづくりなど、陸地での活動をしている団体があります。彼らとの共通の関心が持てると良いですね。

特に優先順位を着けることが無くおしなべて大事だと思いました。

陸域や海域、モニタリングとは別に、交流機会や教育、普及啓発については別個の分科会が東京湾再生推進会議に必要ではないでしょうか？

東京湾大感謝祭が10年開催されたのことで、来年は降は形を変えてその開催と伺っているのですがどのような形になるのか非常に気になります。

- 学生の方の参加がもっと増えると新しい視点の意見が聞けて、楽しくなると思いました。
- 東京湾再生官民連携フォーラムと再生会議（官・行政側）との連携の具体的な仕組みを見直す必要があると思っています。
- 栄養塩の足りないところ、余っているところ、解消出来たらいのに。それと底生生物が居なくならないようにしたいです。
- いつも一定の人でなく色々な人に興味を持ってもらいたいと思っています。

入れない場所(海)が、コロナ禍以後極端に増えた。

東京湾のいろいろな活動や魅力や東京湾自体が私たちにもたらしてくれる恵みを知ってもらうため

流域からの影響は、「汚濁負荷」の他、土砂動態、流量変動、川の形その他いろいろとあると思います。影響の見方も評価軸が変わることにより、評価の結果がプラス、マイナス逆転すると思います。

生物指標については、一般の市民にもわかりやすい生き物が増えた、減ったということに関心を高めてもらうことができるのではないかと考えます。

潮焼けの磯をなんとかしたい。

※ 江戸前勉強会2022、2022年11月～2023年1月にかけて、6回の勉強会を実施しました。詳細は、右記のQRコードより記録をご覧ください。

<https://roastcard.jp/江戸前勉強会/>



<https://coastcard.jp/江戸前勉強会/>